

自然的權力性の一面のみが強調されんとする際、其の示唆する所誠に妙しとせぬ。

本書は、(一)プラトン復興。(二)キリスト教の「神の國」とプラトンの理想國家。(三)カントに於ける世界秩序の理念。(四)ナチス世界觀と宗教。の四章より成る。教授は先づゲオルグ學派の非合理主義的政治中心的新プラトン像を取り上げ、プラトンの國家思想がその中に深い宗教性を包攝しながら、結局人間の自己實現の爲の文化主義的原理に立つ事を指摘され、これに對し、宗教的の國を政治的國家より超出せしめる事により反つて國家に對し全く新しい意義と課題とを與へたキリスト教の重要性を強調される。其の後における國家の内的宗教的基礎づけにとつては、プラトンの理念とキリスト教的理念との綜合が根本課題であり、此の解決を、政治的國土を神の國との關係において人類永遠の理性的課題、歴史の理念に登高める事により達した人がカントに外ならぬ。そして、十九世紀後半支配的になつた自然主義的唯物論的自由主義の無宗教性に對する生の救済として登場したナチスと其の世界觀が、其の極端な民族主義の爲反つて理想主義的使命を失ひ、ナチスの強調する「血」の宗教、「種」の宗教が單なる無宗教に終る危険のある事を述べられ、結論として、「カントの据ゑとしてヘーゲルが却つて撤し去つた所の「批判主義の思惟の限界」に留まる可きであり、「文化と政治とはそれぞれ固有の價值を保持しつゝ相互に協力奉仕」せねばならず、しかもその際の統一の可能性は政治にでなく「宗教的理念に求められねばならぬ」と飽くまで人

間内面性の自律を尊重されつゝ、「國家がかゝる自由の宗教的信仰に裏づけられて初めて鞏固な世界觀的根據を獲得」するであらうと説かれる。

我々は、國家の正しい在り方を宗教的絕對性との結合に求められる教授が、何處までも人間の魂の自主性を尊重される點に深い敬意を拂ふと共に、本書の中に、人間の外的秩序と内的生命との雖も難い相互聯關を史的に繰りひろげたすぐれたヨーロッパ精神史を見出す事に大きい喜びを感じるものである。(岩波書店刊、定價參圓五拾錢)(齋宮正夫)

イギリス帝國主義史論

矢口孝次 著

本書が最も時局的な、従つて時流に禱した際物であるから紹介せんとするのではない。現今のやうに生活地盤の移り行く速さの餘りにも早く、爲めに戦争と一應直線的には、關はりなき文化科學研究の學徒が時には、自分等の爲す所果してどの程度迄、國家に奉仕し居るやの愁なきにしも非ずである。が然し自己の專攻の領域について着實に研究し、時刻れば國家の向ふ所に關し、その研究の成果を公にする事が、結局最も直接的に國に奉ずる事になる所以を本書が教へてゐるからに他ならないのである。

今次の大東亞戰爭が内にはヨーロッパ的近代文明の超克を、外には「世界史に於ける日本乃至大東亞の主體性の自覺と確立」をその課題とする事に關して何人も異論のない所であるが、然も著者と共に、此の「ヨーロッパ的近代は更に大觀すれば著しくアング

ロ・サクソンの近代、或ひはイギリスの近代としての色彩が濃厚である事を認めるならば、大東亞新秩序の建設と云ふが如き世界史的建設の爲めには、我々の存在の「アンチテーゼとしての」イギリス帝國の分析こそ、焦眉の急を要する、亦否應なく對決しなければならぬ問題である事は今更ことあげる迄もない事であり、本書が誕生しなければならぬ譯でもあつた。

著者は年來重商主義やイギリス經濟史の諸問題について造詣深く、屢々示唆に富める論究を學界に贈られたのであるが、今回は特に立派な書物としてイギリス帝國の分析を世に問はれるに到つた事は、時節柄と云ひ、殊にイギリス帝國の世界史に占める位置が文化よりも一層經濟の領域に卓越する事を考へるならば、よく人を得たる喜びは一人である。

著者は先づ「イギリス帝國の構造及びイギリス帝國主義」なる章を設けて、イギリス帝國の基本構造が二重的性格のものである事を指摘してゐる。即ちコモソウエルス構造の性格とその紐帯を多方面より検討してそれが遠心的傾向をとらんとしつゝある事、及び第二の性格たる屬領帝國についての詳細なる分析が爲されてゐるのであつて、現在のイギリス帝國の性格をくつきりと浮彫して餘す所がない。然もその所説の明晰にして判明なる正に本章こそ壓巻の出來と云はるべきである。次に「世界との交渉」に於てイギリス帝國の歴史的性格が根本的に歐洲外的であつた次第を強調せられるのであるが、かゝる歐洲外的性格が既に十七世紀に先驗的に存在し然もそれが十九世紀に到る迄終始一貫、必然性を持つて

展開して來た様な印象を受けたのは獨り筆者の備目であらうか、植民地が既に十七世紀や十八世紀初頭にイギリス國家の動向やその經濟機構とそれ程必然性を持つて結ばれてゐたかどうかは更に再考を要する問題と思はれるのであつて、今少しく偶然性を考慮するの必要がなからうか、最後の「イギリス帝國及び帝國主義の生成」に於ける經濟理論と經濟政策との關聯や「印度支配の發展」及び「アフリカ及び東亞への侵略」等の諸問題は、動きつゝある歴史に直接するが故に、興味津々として盡きず、殊にイギリスの植民地擴大の常套手段たる尖兵としての特許會社から政府の支配への移行の如き、その謀略を働いて餘す所がないのであつて吾等の日々の歴史建設に資する所多大なるものあるは疑ひを容れないのである。敢へて江湖に推賞したい。(甲文堂書店發行、定價貳圓四拾錢) (血闘田莖)

ペーリリング海 (新世界叢書)

小葉田 亮著

「山崎大佐を隊長とする二千數百名のアツツ島守備部隊は、五月十二日以來寡兵克く優勢なる敵に對し血戰繼續中のところ、五月二十九日夜、壯烈なる最後の攻撃を敢行し全員玉碎、傷病者にして攻撃に参加し得ざるものは之に先だち悉く自決せり……」ラジオの報ずるこの悲壯極まる大本營發表に血潮の逆流を覺えたのは本稿締切の前日、五月三十日の夕刻であつた。丁度その日、私はこの紹介執筆のために小葉田氏の著書を机上に展げ、アリューンヤン方面の地圖をも参照しつゝ、靜かにまた讀返へしてゐた時であ